



日本聖公会
大阪教区教務局
〒545-0053
大阪市阿倍野区
松崎町2-1-8
TEL 06-6621-2179
FAX 06-6621-3097
発行責任者
教務局長 司祭 原田光雄

(HP) <http://www.nskk.org/osaka/index.htm> (e-mail) office.osaka@nsk.org

第415号 2010年10月10日発行

9月19日、誕生日を迎えたわたしは来年3月末をもって定年退職を迎えます。最後に言い残すことをと原稿の依頼がありました。

1989年4月、神戸教区から大阪教区へ参りました。22年間大阪教区の司祭として、皆さんとの交わりを頂きました。その頃、教区が変わるといふことで悩んでおりました時、高槻聖マリヤ教会の方が神戸の牧師館へお



言い訳の記

司祭 ヨハネ 成田 邦雄

する必要に迫られ、時の高野主教に許しを得まして、高槻での勤務をといて頂きました。日曜日には聖ルカ教会の礼拝に奉仕することが出来、ありがたいことでした。

同時期に妻の病気も進行し、視覚障害1級になり、引き続き夫婦で介助の生活に追われることになりました。2005年4月から短い間でしたが、聖パウロ教会牧師として勤務させてい

いになり、妻の病気の事を承知の上、牧師として障がいを持った妻と共に来ていただきたいとの言葉に、赴任する決意をいたしました。阪神淡路大震災の直前、妻の父が逝去しまして、年老いた母のことが大きな心配でした。大震災によって我が家も半壊、応急の処

置をして年老いた母に住んでもらいました。しかし老化が進み同居して介助

ただきました。もし、許されるならとの想いで退職までとの祈りの内の事でしたが、やはり病気に勝てず、4年間、信徒のみなさんにはご不便をお掛けし、大西主教様の着座を機に主教座付とさせていただき牧師館を離れることになりました。

一人の老いた母と、一人の障がい者としての妻との毎日の中で、御言葉に

耳を傾ける毎日でした。しかしその毎日には私にとってとても実り多い日々でした。一人の人に寄り添う生き方は、教会の大勢の信徒たちと共ににぎやかに、行事を行い、喜びを共有する牧師の行き方とは全く違いましたが、一人の人に正面から向き合い、受け入れられた喜びを二人で分かち合うことの出る。これが教会の基本ではないだろうかと思った毎日でした。母はその後1999年1月6日逝去しました。新しくなった家で、家族に看取られて行きました。

思いかえりますと、牧師を意識しながら、一人の人として愛する人を見守っていく毎日であったと思います。神様がわたしに与えてくださった尊い命を、十分に燃焼する場が、わたしには家族という狭い世界だったとは思いますが、それがわたしのサイズだったのでしょうか。

こうして現職の司祭として定年を迎えられますこと、心の奥底から喜びに包まれております。信仰の場から去るのではありませんので、これから大勢の方々との交わりの場がきつと有ることでしょう。変わらないお付き合いを、どうぞよろしくおねがいします。

(なりた くにお)

大阪教区教区礼拝

550人以上が参加盛大に

聖歌隊も170人の大編成



2010年大阪教区礼拝は、9月26日(日)プール学院勝山キャンパス清心館で行われた。今回は開催の前に大きな障壁が立ちほだかった。それはJ.R環状線森之宮駅付近で見つかった不発弾処理のため、当日午前8時30分から正午まで運転を休止するというのだ。しかし心配はいらなかった。

キリスト者は危機のときこそ強くされることが実証された。出席者が553人と、ここ数年にない参加人数となり、感謝と賛美の聖餐式を主の導きの下、力強く、豊かに守ることができた。

今回の教区礼拝には、準備の段階から3つ柱が考えられていた。

1つ目は大聖歌隊の編成で、数カ月前から各教会に呼びかけが行われ、当日170人が参集し、すばらしい賛美をささげることができた。指揮者の川村輝夫兄(石橋聖トマス)、奏楽者の辻彩乃姉(川口基督)、植原久美子姉(石橋聖トマス)も「大変感動した」という感想を述べておられた。

2つ目は、来年3月末をもって定年退職される4司祭に、礼拝の特に大切なところを担当して頂くということであった。式典長に山野上素充司祭、

補式に福田光宏司祭、福音書朗読に成田邦雄司祭、説教者に奥康功司祭が、それぞれの任に当たった。

3つ目は次代を担う青少年に奉仕をしてもらうということであった。十字架に内田聖君(川口基督)、トーチには井上岳君・井上光君(西宮聖ペテロ)、サーバー

には斎藤悠君・斎藤はるさん(石橋聖トマス)が奉仕をし、未来への希望の光を参加者一同に与えた。

特筆すべきは、聖書朗読者として奉仕された志賀成全兄(尼崎聖ステパノ)と三宅享子姉(石橋聖トマス)の朗読である。心のこもった張りのあるすばらしい朗読で、出席者一同に感銘を与えた。また、

大阪教区の財務について

いつも教区の財政につき、お祈りとご協力をいただき感謝いたします。

いままでも財務委員会では、教役者の給与手当、福利厚生など、主として支出を中心に色々な施策を話し合ってきました。健康診断費用の補助、災害補償、慶弔規定の見直しなどはすでに運用を始めています。そして今、教役者給与基準の改定という課題に取り組み、次の定期教区会に提案することになりました。その内容は、会計委員懇談会等で具体的な説明をしていますので省略しますが、信徒の皆様にご理解ご賛同をいただきたいと思っています。骨子は生活費負担の大きい年代に重点的に配分すること、牧師、副牧師など

職責を考慮した基準を作ることにあります。

皆様の尊い献金をどのように用いるのが教区・教会のためになるのかということが財務委員の大きな課題でした。しかし、現在殆どどの教会で、信徒の数が減り高齢化しています。そして献金額は頭打ちです。会計委員の皆さんは本当に悩んでおられます。統計で見ても、2000年度大阪教区の信徒一人当たり献金額は11万円でした。2009年度は10万4千円です。10年間で大阪教区の総献金額は、5800万円減っています。川口基督教会が二つなくなっただけより大きな金額です。年金生活者が増えたからでしょうか。若い信徒の献金が少ないのではし

聖卓とフロンタルは、今後の教区礼拝のために新調されたもので、製作者は、聖卓が服部智樹兄、フロンタルは斎藤みち姉(共に石橋聖トマス)である。

プール学院関係者をはじめ多くの方々の協力によって、主にある一致・交わりを実感する教区礼拝となった。

(編集部)

うか。理由はあるのでしょうか。今考えなければならぬことは、献金は神様が与えてくださった恵みであることを、私自身もつと知ることだと思っています。大阪教区信徒の力を信ずることだと思っています。

これから、財務委員会が考えなければならぬ課題は、一人ひとりの献金が増えるためのお手伝いする事だと思えます。それから教区と教会の財政をどうして健全に維持していくかということ、毎年大きく変わる教区費の負担を平準にできないかということ、教会間の信徒負担の較差を少なくできないかということ等だと思っています。信徒の皆様の一層のご協力をお願いいたします。

(財務委員長

アブラハム 佐野 重雄)

主と共にあゆむ 10

み言葉に支えられて

スザンナ 米田久美子

私がキリスト教と出会ったのは、プール学院中学校への入学がきっかけでした。毎日

の礼拝で聞く聖書の言葉や聖歌、そして週に一度の聖書の授業が新鮮で、程なく私はキ

を紹介して下さいとお願いで、今も通っている大阪聖愛教会を紹介して頂きました。

教会に行き始めると、学校の礼拝とはまた違ってチャントを歌ったり、聖餐式で祝福を頂くことがうれしく、毎週日曜日を楽しみにしていました。そのうち洗礼を受けたいと思うようになりましたが、父の反対でそれはかないませんでした。いつか洗礼を受けられる日が来るかも…と思いつながら教会に通っていました。そして「その時」は思いも

かけない形で訪れ、高校3年の夏に受洗する事が出来ました。その後、関西学院大学の神学部で学ぶ機会を頂き、学部卒業後は淀川キリスト教病院に就職し、伝道部で働く機会を頂きました。それぞれの場で素晴らしい先生方や友人達に巡り合い、私にとっては今も忘れられない貴重な体験をたくさん得ることが出来ました。

信仰と山登り



この夏、念願の金剛山(標高1125m、大阪で一番高い

山)に登った。季節や天候を問わず、日課としてこの山に5000回以上登っている人

も多い。常連は早朝、山頂へ登り、小休止後登山口まで下山するのだが2時間はかかる。わたしはゆっくり登ったとはいえ、往復で約3時間以上かかった。日ごろ登っていないから当然のことである。

かつて2000mを越える信州の山々をいくつも登ってきたので、大したことはない、たかをくくっていたのだが、家に帰って来てから数日間足は筋肉痛がとれなかった。

山登りは素晴らしく、楽しい。日々の鍛錬が一定のリズムを作り出し、今、このようにして生かされている喜びを実感できるからに他ならない。信仰生活はしばしば山登りにたとえられる。無理をしてはだめである。急に勢いよく

スタートしても息切れしてしまう。地道に一步一步、毎日歩いて行くことである。洗礼・堅信を受けていることは大きな恵みであるが、そのことに安住してしまつてはいけない。確かな道標(道しるべ)に従って歩いて行かないと道に迷ってしまう。病気の時、苦しい時、思い悩んで落ち込んでしまった時など、立ち止まって道標を見る。行き過ぎたかなと思つたら、思い切って道標まで引き返す。その勇気が山登りには必須である。

信仰生活も同じである。その原点である確かな道標、祈

りとも言葉(聖書)と聖餐に立ち返ることをいつも最優先の課題とするように心がけたい。主イエスはもとより、ノア、アブラハム、モーセ、エリア、エリシャをはじめ、教会史上の多くの指導者たちも山に登り、そこを神と出会う場所、祈りと黙想の場所としてきた。日本アルプスの命名者、英国の宣教師ウォルター・ウエストン司祭は日本で伝道し、山にもよく登つたようだ。彼にとつては山が神と出会い、宣教の幻を与えられるそのような場所であったのではなからうか。

しかし、この間、全てが順調であった訳ではなく、先が見えずに不安な時を過ごした事もありましたが、たくさんの方々に助けられ、支えられて乗り越える事が出来ました。その時は「なぜ私がこんな目に…」と思うばかりでしたが、「あなたがたを襲つた試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共にそれに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」(Iコリント10・13)

(主教サムエル 大西 修)

(次ページ最下段につづく)

2010年プレ宣教協議会

宣教する共同体のありようを求めてに出席して

聖職候補生 ジョイ 千松 清美

日本聖公会「プレ宣教協議会」は富士箱根ランド箱根スコーレ・プラザ・ホテルで、8月18日(水)から3日間の日程で開かれました。

はじめに、プレ宣教協議会実行委員長である谷昌二主教から「2008年第57回(定期)総会でこの協議会開催議案の提案理由において、私たちは、全ての教会につながる



人に向けた課題として、みんなの問題としていっしょに考えていきたい。そして、礼拝の持ち方、用い方に広がりを得て、10の分科会で取り上げることが持つ、さまざまな環境に目を向けながら、教会のこれからの歩みを話し合い、考えていきたい」と述べられました。(分科会…貧困/高齢化社会を迎えて/正義と平和/社会的少数者/ストレス社会と心のケア/青少年・子ども/宣教の担い手を育てる/教区・教会の財政/礼拝と祈りの生活/組織・教区間協働)

私は、管区で催される集まりに参加するのは今回が初めてで、自分の緊張を隠すために黙って傍観者でいようと考えていました。また、この協議会の目的や意味などを事前に把握することなく、分科会でも単なる今後の参考のために聞くだ

けでいいだろうと思っていた。しかし、全体的なプログラムは、講演とグループ・ディスカッションが交互に生まれ、実際にはただ聞くだけでは済まされませんでした。グループでは、他の人の話を自分なりに理解して、いまの自分の現状と照らし合わせた意見を求められました。

私は、結局、協議会のあいだ積極的に発言することはできませんでしたが、この協議会に対する自分の意欲のなさを深く反省しながら、多くの人の話しや意見をただ黙って聴ききくことで、じっくりゆっくりと考える時間をもらったことを感謝しています。それは、これから自分が歩んでいくなかで、自分の課題とすべきことを改めて教えられたこと、そして、同じような悩みや問題をもってキリスト者として働いている多くの共同体の兄弟姉妹がいること、一人

ではなく、いっしょに働いていけばよいという励ましを受けたからです。とくに、協議会の最後に大きく励まされた二つの言葉を紹介します。ひとつは、西原廉太司祭の話で、「聖公会の教会論は、徐々に膨れて大きくなるが、最後は破裂してしまう。バルーン型ではなく、一本一本の枝(教会であり、私たちである)を重ねていき、しっかりとした、壊れにくい、鳥の巣(アングリカン・コミュニケーションという巣型)である」。

もうひとつは、植松誠首座主教の言葉で、「分科会の発表で、高齢化社会を考えると、高齢者は教会の宝であるという話があった。それは私たちからの視点であって、高齢者と言われる方々の視点で見ると、そのままがいい、いまのままに神に受け入れられているとご本人たちが思う事が大切である。そして、私たちがそのままでもいい、私たちが自身のままに宣教する、伝える人になるということが大切である。」

(せんまつ きよみ)

(前ページからつづく)

このみ言葉に出会った時、あの時の辛い出来事は私にとって必要な事だった、と思うようになり、感謝でいっぱいになりました。

「主は人の一歩一歩を定め御旨にかなう道を備えてくださる。」(詩編37:23)

これから先もどんなことがあるか分かりませんが、神様が備えてくださる道を一歩一歩感謝しつつしっかりと歩んで行きたいと思えます。(よねだ くみこ 大阪聖愛教会信徒)

世界の窓

○ルワンダ管区大主教選出される

ルワンダ聖公会管区の大主教にオネスフォレ・ルワジェ主教が選出された。大主教の着座式は、12月12日に予定されており、12年間大主教の任に従事されたエマニユエル・コリニ神父から引き継がれる。(Anglican Communion News Service: 9/21/2010)

(次ページ最下段につづく)

「神学生を囲む集い」で囲まれて 支えられていることに感謝

聖職候補生 ヨハネ 古澤 秀利

主の平和が私たちと共にありますように

去る8月29日(日)、城南

キリスト教会において「神学生を囲む集い」が開かれました。この3月に林正樹聖職候補生がウィリアムス神学館を修了され、今年度は千松清美神学生、奥村貴充神学生、古澤秀利神学生の3人が大阪教区の神学生としてそれぞれの神学校で学んでいます。この3人を励ますために100



奥村神学生 (右)

人を超える方々が集まってくれました。本当に感謝です。

今年度の「神学生を囲む集い」は去年までのものと内容が少し変わりました。去年まで行われていた神学生対抗のゲームとおめぐみゲームに代わり、今年度はそれぞれの神学生が教会に派遣されることを前提に「私の牧会の抱負」というテーマで自分が牧会を行うにあたって大切にしたい



千松神学生 (左)

事柄などをお話しさせて頂きました。「神様を堂々と賛美する教会」「信徒さんと共に歩むこと」など、それぞれの神学生が学びの中で感じていることを言葉にすることができたと思います。

その後神学生への質問を頂きました。その一つに「いま教会では現在受聖餐者数の減少や、信徒の高齢化が進んでいるがこれらのことについてどう考えているか」という内容のものがありましたが、この質問に対して千松神学生は「プレ宣教協議会での学びを踏まえ、「教会に高齢者がおられることを否定的に考える必要はないのではないか。むしろ恵みではないか。」と返答



古澤神学生 (右)

されました。印象的であったと同時に私たちにとってとても大切な事柄だと感じましたのでご紹介させて頂きました。

さて、「神学生を囲む集い」

に参加させて頂くたびに「私たち神学生は支えられているな」と思うのですが、今年の囲む集いでは特にこのことを強く感じました。「私の牧会の抱負」というとても難しいテーマではありましたが、この二年半の学びを通して自分が何を考えているのかを皆さんにお伝えすることができましたし、皆さんから質問を頂くこともできました。この会話を通して教区の皆さんがどれほど神学生を支えようと思ってくださっているかが伝わってきたな、と感じています。そしてこの期待に私たち神学生はどう応えることが出来るか、私たちの大切な課題であると思います。

この集いでは心の底から励まされました。大阪教区のお一人お一人に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

(ヨハネ 古澤 秀利)

(前ページからつづく)

○ローマ教皇、ランベスパレス訪問

ローマ教皇ベネディクト16世が、カンタベリー大主教の居城であるランベスパレスを訪れた。イングランド・スコットランド・ウェールズの各教区からカトリックと聖公会の主教および司教が集い、大主教図書館のグレートホールにて会議を開いた。この会の中で、両教会の対話の必要性と神からの召命の分かち合いの重要性を確認した。また、ローワン・ウィリアムズ・カントベリー大主教とベネディクト16世がプレゼントを交換し合い、ウィリアムズ師父は12世紀に作られたランベス聖書の複製をベネディクト16世に贈呈した。1982年に教皇ヨハネ・パウロ2世がロンドンに向き、当時のロバート・ランシー・カンタベリー大主教を訪れたことはあるが、ローマ教皇がランベスパレスを訪れたのは歴史上、初めての事である。

(Anglican Communion News Service: 9/17/2010)



京都教区との協働を目指して 聖職と教会紹介 1



司祭 バルトロマイ 三浦恒久

(桃山基督教会牧師・伊勢聖マルコ教会管理牧師)

わたしは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。

わたしたちは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。

長じて1974年、京都聖マリア教会との不思議な出会いがあり、同年、洗礼と堅信を受けました。そして、1978年、ウイリアムス神学館に入学し、1981年、神学館卒業と同時に、伊勢聖マルコ教会に赴任しました。同年、執事に按手され、翌1982年結婚、そして司祭に按手されました。

わたしたちは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。

わたしは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。



司祭 韓

韓^{ハン}相^{サン}敦^{ドン}

(京都聖ヨハネ教会牧師)

わたしは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。

わたしは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。

わたしは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。

児数は70人です。

わたしたちは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。

わたしは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。

(みうら つねひさ)

わたしたちは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。

わたしは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。

わたしは1950年に、津軽半島の三厩^{みうま}という漁村で生まれました。義経^{ぎけい}寺という寺が遊び場だったせいか、小学生の頃から、宗教家になりました。というあこがれを抱いていました。

広島平和記念礼拝に参加して

三野 萌子

私は8月5、6日に広島を訪れ、広島平和礼拝実行委員会主催「広島平和礼拝2010」(事務局・日本聖公会神戸教区 広島復活教会)に参加してきました。大阪教区からは、大西主教、内田聖君(川口基督教会)それにプール学院中高の8人(生徒5人、保護者1人、引率教員2人)と



教員親子2人が参加しました。

初日は被爆体験記の朗読会、平和公園での祈りの集いの後、カトリック世界平和記念聖堂まで平和行進をし、平和祈願ミサに出席。翌日は、午前8時から原爆犠牲者追悼聖餐式、その後広島復活教会信徒の方に案内していただき、石碑巡りをいたしました。わずかの時でしたが、参加者が原爆の悲惨さを心に留めるとともに、ヒロシマ・ナガサキに投下された原爆が、様々な問題を今なお残していることを実感した2日間でした。

6日に行われた石碑巡りで、朝鮮の犠牲者の方や日本の犠牲者の方が眠っていらっしやるお墓を案内していただきました。日本の犠牲者の身元特定はほとんど終わっているけれども、強制連行された朝鮮の方々の方々の身元特定が、あまり進んでいないことをそこで教わりました。

小学校の修学旅行で行った

平和記念資料館で、戦争体験者や資料館の職員の方々から話を聞いたことはあったのですが、やっぱり「百聞は一見にしかず」の言葉どおり、巡ったことよってさらに理解が深まりました。

私は最初、戦争は悲惨なものだから平和を全ての人が望んでいると思っていました。けれど5日に行われた平和行進の時に、戦争に賛成している右翼の人々から「お前ら帰れ」と言われた時、若干ビビリながらもやっぱり井上チャレンが仰ったように、世界平和を望んでいない人々がわずかながらもいるのだなと思いました。私はコーラス部と

共に学び、共に行動し、共に祈ろう

1945(昭和20)年8月6日午前8時15分に世界で初めて広島に原子爆弾が投下されました。

当時の建物のほとんどは木造建築だったため町はほぼ破壊され、多くの人々の命も奪

して「友達が行くなら、私も行こうかな」という軽い気持ちで今回のツアーへの参加を決めました。しかし、広島へ行き小学校の時には学ぶことができなかった新たなことを学ぶことができました。

また、日本で戦争が起こったという事実を次の世代に伝えていくという、将来担わなければならない新たな役割が、戦争体験者によって託されたように思います。次の世代の未来が平和な世界であるかどうかは、私達にかかっている。

そう、私は思うのです。
(みの もえこ プール学院 高校3年)

セオドル 内田 聖

われました。かろうじて生き残った人達も原爆症という病気にかかり、今なお苦しんでいます。

僕は神戸教区が主催している「広島平和礼拝2010」に大阪教区青年代表として8

月5、6日に広島に行ってきました。



カトリック広島司教区と日本聖公会神戸教区の合同プログラムでの平和祈願ミサがおこなわれました。

この広島平和礼拝2010に参加して、この2日間の中でたくさんの方々の事を学び、たくさんの方々の場所を見学して戦争の悲惨さと当時の広島の人々の苦しみを改めて感じました。

今もこの世界には核兵器がたくさん存在している事を聞き驚きました。

平和な世界にしていく事の重要性和その難しさを感じる2日間でした。

(うちだ さとる 川口基督教会)

川口基督教会が創立140周年の記念感謝礼拝

植松誠首座主教が説教で「宣教」を強調

川口基督教会では9月23日(木・祝日)、創立140周年記念感謝礼拝を挙行し、北海道主教・首座主教植松誠師父をはじめ多くの方々をお招きし、ウイリアムス主教が川口居留地で福音の種をまかれて以来140年、「み手の中で」

教会が今に至った感謝と喜びを共に主にお献げした。

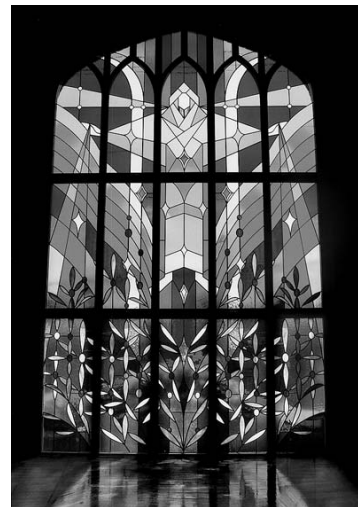
礼拝は同日午後1時から大西修主教の司式で始まり、式典長・内田望司祭のもと、同教会を司牧された宇野徹主教、木村幸夫司祭、(村岡明司祭は体調不良のため欠席)、また



た当教会出身の坪井克巳司祭、奥康功司祭、鍋島守一司祭、竹林徑一司祭、松平功司祭が補式にあたり、植松主教が説教された(内容は別掲)。礼拝参加者は343人に及び、来賓として西区区長、本田小学校校長、プロテスタント代表の方々が列席され、礼拝堂は満席となり、数十人が会館2階の食堂でテレビを通じ、礼拝を行った。約2時間に及んだ礼拝の最後

には、英国の作曲家家エドワード・エ

ルガーの「威風堂々」の曲に、当教会有志が作った歌詞「たたえよ、主を」を高らかに歌い、幕を閉じた。その後は会場を会館3階に移してティーパーティーを催



140周年を記念して聖堂2階に完成したステンドグラス「ゲッセマネの祈り～み手のなかで～」

し、来賓のご挨拶のあと、坪井司祭や信徒たちの教会の思い出を聞いたあと、軽食と飲み物を頂きつつ、交わりのひとときを持った。なお、礼拝で献げられた「大



会館3階でのティーパーティー

阪教区の宣教」のための献金は230,245円であった。(編集部)



森祐理さんのチャペルコンサート「み手の中で」

230人が「歌の証し」に感動の拍手

川口基督教会では、今回の140周年の催しの一つとして、9月23日午後5時30分から礼拝堂で、クリスチャン・アーティストの森 祐理さんのコンサート「み手の中で」を開いた。森さんは京都市立芸大音楽部声楽専修卒。福音歌手として毎年、100回以上のコンサートをこなす。阪神・淡路大震災で新聞社入社

直前の実弟を失った体験を通して、国内外の被災地に赴き、「心の救援物資」を届ける慰問コンサートを展開し、福音歌手としては異例の法務大臣表彰を受賞した方。礼拝堂に詰め掛けた約230人の聴衆は、1時間半にわたる森さんの歌とトークを通じた信仰の証しに、感動の拍手を惜しみなく送った。(編集部)

植松・首座主教の説教の要旨

自分の言葉、自分の生き方で宣教を

川口基督教会創立140周年記念礼拝に招かれ、有難うございます。私にとって26年前、司祭に按手され、司祭としての出発点であるこの教会に、いま説教者として立たされていることに深い感慨を覚える。

信仰の壮絶さを感じる。自分の生きていく間には完成した姿を見られないのに、喜びつつ、祈りながら石を一つ一つ積み上げていく人々の行いに、ただただ圧倒され、壁などをそつと撫で、人々の信仰を思った。

私は時間を作って巡礼の旅をしてきた。イスラエルのような聖地に限らず、アッシジやイギリス各地の修道院、大聖堂・教会も訪れた。いつも感動させられるのは、時間を超越した人々の篤い信仰だ。大きな教会や大聖堂を訪れ、それらが数百年かけて建てられたと聞くと、信じられな

多くの聖職、信徒が天のみ国で安らいている。川口基督教会の納骨堂には多くの方々のご遺骨が安置されていて、聖餐式が献げられるたびに、私たちはまさに天の会衆とともに主を賛美している。



北海道教区の札幌市内のある教会では8月の第一日曜日に逝去者記念礼拝をされるが、200人にもものぼる逝去者の名前と逝去の年月日を読むのに15分はかかるので、教会委員会である委員が、牧師に、「その分、説教を短くしてほしい」と言ったところ、牧師は逝去者の名前を読みあげること自体が大変な説教

だと気付かされた。主イエスは善き羊飼いとて名前を呼んで招き入れ、緑の牧場に憩わせ、迷い出たときには名前を呼んで探しに行かれるという事実がそこにあり、限りなく広がる主の恵みの証しを結集したものがその教会の宣教だと思ふ。

昨年今日(9月23日)、日本聖公会宣教150年を祝った。「裸足で宣教する」、すなわち日本聖公会が日本という地において、日本の人たちに自分たちの言葉で福音を語ることの大切さを、カンタベリー大主教は説教の中で力説された。私たちの宣教とはどのようなものだろうか。私は、

宣教とはとても単純なこと、すなわちキリストの福音を証しすること、そして人々をキリストの愛と交わりに招くことに尽きるところと思う。自分の言葉、自分の生き方、生き方で、キリストを

証しすること、み言葉を、主イエスの愛を、私への慈しみを、希望を人々に語ることだ。それは現実逃避ではなく、キリストの福音に根ざした私たちの信仰のあり方と思う。なぜ、私たちはこのような夢や希望を持ち続けられるのか。それは、私たちの信仰が復活への希望に基づいているからだ。

私は毎年、イースターのころ、北海道の酪農とジャガイモの産地で有名な今金町にあるインマヌエル教会を巡回する。農村の教会が大事にしている種の祝福をするためだ。その年に播く種を信徒たちが

祭壇の前に供え、私が聖水を振って祝福の祈りをささげる。私はこの種の祝福に毎回、大きな感動を覚える。それは、これが私たちの復活の信仰と結びついているからだ。ゴルゴダの丘の彼方に復活があることをすでに知っている私たちは、いつも一条の光、夢と希望があるはずだ。この希望と夢に目を向けつつ、順境の時も、逆境の時も、日々の小さな信仰の営みを忠実に続けていくことを大切にしたい。それが私たちの信仰の先輩たちが私たちに証していることではないだろうか。

(要約編集部)

アジア教会婦人会議日本委員会 (ACWCJ) 第24回関西支部一日研修会

互いに受け入れ合いなさい

～多様な社会の中で～

ローマ信徒への手紙 15章7節



礼拝 DAY 礼拝

聖書研究 渡邊さゆり牧師 (日本バプテスト 曾根キリスト教会)

講演 平野淑子氏 「ウイメンズネット・こうべ」スタッフ (日本基督教団神戸教会)

日時 2010年10月30日(土)10:30~15:30

場所 日本聖公会 川口基督教会

日韓・在日学習会

『韓国強制併合100年とキリスト教』

司祭 ペテロ 岩城 聡

9月11日の土曜日午後、大阪聖パウロ教会で、教区の在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会の主催による第6回目的日韓・在日学習会が開かれ、約35人が参加した。講師は、立教大学チャプレンの香山洋人司祭。

香山師は、日本による韓国強制併合に至る歴史とその中に含まれる日本及び朝鮮における問題性を詳しく分析した上で、併合とそれ以降の過程の中で日本のキリスト者が果たした役割を批判的に紹介された。キリスト者としての先達である人々が、韓国に対してどのような意識を抱き、ど

のような言葉を発していたのかを聞くにつれ、参加者の中には悲しみとも怒りともつかぬ感情がわき起こっていったように思えた。しかし、そうした歴史と正面から向き合うことによつてしか、将来の明るい展望、真の共生は生まれてこないのだとも感じた。

参加者の中には、在日韓国・朝鮮人も多くおられ、講演会後の茶話会では話が大きいはずんだ。

(いわき あきら)

玄界灘をこえて

『外キ協・第3回青年の旅』に参加して

セシリア 浅海 由里恵

7月30日から8月6日の日程で、外登法問題に取り組む全国キリスト教連絡協議会(以下外キ協)主催のもと、「第3回多文化・多民族共生キリスト者青年現場研修プログラム(以下青年の旅)」が行われた。全参加者がコーディネートも含まれ9人という小規

模なものだった。だからこそ参加者のそれぞれが負う、また日本と韓国という2国が抱える課題について取り組んだ、大きな「旅」となった。

外キ協の「青年の旅」は、2008年から、5年計画で進められ、今年で3回目になる。全旅程はまさに強制連行

を辿る旅となっている。九州の小倉に集合し、筑豊での炭鉱などの連行と過酷な労働を学ぶ現場研修を行った後、関釜フェリーで釜山に渡る。今回は釜山で学んだ後、陝川・仁川・ソウルを学んで釜山に戻ってくる。1週間絶えず移動しているのが、「青年の旅」の特徴である。もちろん、各地でのキリスト者・キリスト青年との交流も含まれる。

今回の研修は、歴史的な課題といえ、北九州では筑豊炭鉱地域での強制連行を、韓国釜山では民主化闘争と日本に

よる植民地支配を、慶尚南道陝川では在韓被爆者問題を、そして、ナムムの家では、日本軍「慰安婦」について、ソウルでは西大門刑務所をめぐり、水曜デモに参加した。今日の課題としては、仁川で外国人労働センターと中華基督教仁川教会を訪問し、釜山では、釜山外国人労働者宣教会と韓国外国人宣教会釜山支部という2つの団体を訪問した。

また、今回は大韓聖公会のソウル主教座聖堂の地下礼拝堂で「韓国・併合100年在日韓日基督教者青年祈祷会」が行われ、在日・日・韓それぞれの青年が祈祷文を作成し、40人ほどが参加した。日本からの参加者が作成した祈祷文の一部を紹介したい。

「今わたしたちは、同じ過

くの傷を抱え、癒えない過去と向き合っている人々のために／神様、どうか私たちに、過去を真摯に受け止め、来るべき希望の未来を作り出す知恵と勇気をお与えください／弱き私たちを強め、平和を作り出す者とならせてください」と。参加者の一人ひとり思いが詰まった祈祷文となった。

最後に、私がよく問われることについて。「なぜ、韓国なのか」と。その度に考えてしまう。しかし、私にとって韓国は「近くてものすごく近い国」なのだ。今回、玄界灘の海を越えるとき、在日1世代たちはどんな形であれ、この海を渡り日本に来たのだと思つた。しかし、私にとってはあつかなかつた。

今回釜山で出会った方が「社会で生きていくことこそが、地の塩となる」と、おっしゃった。私にとって、この「地の塩」であり「世の光」が朝鮮半島なのだと思つており、私はそういう場所でも働きたいと強く祈っている。

(あさうみ ゆりえ 聖ガブリエル教会)

わいわい村レポート 大阪教区青少年キャンプ活動報告

サムエル 野見山 暁



今年も紀泉わいわい村で8月9日から11日までの熱い3日間を過ごしてきました。参加者は小学校3年生から中学校3年生までの子供達が27人(男女別で見ると、男子10人、女子17人。学年別に見ると、小3が1人、小4が5人、小5が8人、小6が5人、中2が7人、中3が1人)で、キ

ャンプの企画や運営を行ったスタッフは35人(キャンプ長である齊藤先生を筆頭に、青年スタッフ15人、高校生スタッフ3人、シニアスタッフ6人、食事スタッフ6人、教役者4人)の計62人という大所帯でした。子供達、スタッフ共に昨年よりも若干名増えたことで非常に賑やかで楽しいキャンプを行うことができました。特に、今回のキャンプでは初参加の青年スタッフが7人も増えたので、これからのキャンプ運営にも是非関わって欲しいなと考えています。さらに、今年の特徴として、以前このキャンプに参加してくれた子供達が高校生スタッフとしてキャンプの運営に携わってくれたことが挙げられます。参加する側と運営する側の両方を体験できた事でリーダーの大変さや自分の力不足等、いろいろなことを感じてくれたよう

で今後の更なる成長が期待できました。

次に、キャンプの前身に目を向けてみますと、まず今回のテーマは「君は何を探さか!?」で、主題聖句が「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。(マタイ7・7)」でした。このテーマと聖句を選んだ理由は、参加者である子供達が主体的に動く事で自ら学ぶことや行動することの大切さを感じて欲しかったからです。ただ、与えられた内容を淡々とこなすだけではせっかくのキャンプも楽しさが半減してしまいうでしょう。そこで、プログラムも子供達が楽しめる内容を前提として、子供達が主体的に取り組む事でより楽しめるような仕組みを取り入れました。具体的に言うと、初日に行った「選択プログラム」では、木工クラフトとわいわい村オリンピックという異



なる2つのプログラムを用意して、各々のグループで話し合った上で、どちらに参加するかを決めてもらいました。また、2日目の昼食を自分達で作るプログラムでも異なる3種類のメニューを用意して、子供達には自分でやってみようというメニューに別れてもらいました。このように、子供達に「自分で決断」させることで実際にプログラムへの取り組みが少し熱心になったのだと思います。みんな一生懸命取り組んでくれました。

さて、今回のキャンプでも長い時間をかけてミーティングをしてきました。が、長年積み上げてきているはずのノウハウがしっかりと翌年以降に活かされていなくて感じました。私自



身、今回で4回目の参加となりますが、今年初めてキャンプ全体の統括を任された事で今までとは違った視点で青少年キャンプを見ることが出来ました。その上で今後のキャンプの課題として挙げられるのが運営の組織化でしょう。なかなか難しいことではあると思いますが、どんな小さな集団にも組織があつて、各々が役割を持つており全体として機能しています。それを学ぶだけでも青年スタッフには非常に良い学びになると思います。

最後に、今回のキャンプを一緒に創り上げたスタッフの皆さん、参加してくれた子供達、そして様々な形で応援してくださった方々、そして、最後まで見守ってくださったイエス様に感謝します。そして教区の皆様には来年以降も青少年キャンプへの支援を宜しくお願い致します。
(のみやま さとる 実行委員長、芦屋聖マルコ教会)

「教会奉仕者・聖職者への道セミナー」に参加して

バルナバ・ヨハネ 井出 一志

8月4日(水)～6日(金)、豊かな自然に包まれた売布・黙想の家には、本当に静かな時間が流れていました。慌ただしい日常から抜け出して、自分のあり様を少し落ち着いて見つめてみよう！という思いを抱き、参加しました。

ところで、20年以上、

小学校で子どもたちや保護者や教師に接している私は、マスクミをにぎわす児童虐待・大人や子どももの暴力に心を痛めています。私の仕事の中でもそうした悲しい事象は、たくさん見受けられます。一方で、おそまきながら、自分の家庭生活にも3人の子どもたちが与えられ、日曜学校で小さな手を合わせている姿に感動しつつも、簡単にはいかないうちで悩みもたたく



んかかえていました。そんな思いの中で参加したこのセミナーは、私にとって特に2つの点で収穫がありました。一つは、参加された人々との交わりからの気づき、もう一つは、瞑想や黙想のコツを学び、神様との豊かな対話のよりよい方法を得られたことです。

まず、ここに集われたみなさんの多種多様な生き方は驚きでした。さまざまな社会人経験を経て聖職になられた先生方、神学生のみなさん。社会人としてのキヤリアを終えられ、さらに奉仕する道を求められているみなさん。一般社会での労働と牧会を両立される聖職者にも出会いまし

た。私の今後の人生の中で、悩み、傷つき、困っているたくさんの子どもたちや保護者や多くの方々に、どのようにつながり、神さまの豊かな愛を伝えていけばいいのかを考えるとヒントが与えられたように思います。

また、もう一つの収穫の黙想・祈りの方法は、なかなか難関でした。趙鍾必司祭(チョウジョンピル)の聖なる読書(レッチオデビナ)のお話や大工さんでもあるスコット・マーレー(労働)

司祭からは、黙想をサポートするさまざまな技(呼吸・マントラ・自分の体・自然を感じたりしながらの黙想、聖書の登場人物の経験をする黙想等)も学びました。特に個人指導いただいた朝の散歩を生かした黙想ウォーキングは私でも続けられそうで、さらなる祈りと慈愛の中で日常に戻る勇気を得ました。恵みの三日間に感謝!

(いで かずし 城南キリスト教会)

ワークショップ

パイプオルガンを弾いてみよう

アゲネス 高橋 明子



夏休みに入ってはじめての日曜日、7月25日(日)午後2時から、川口基督教会でオルガンワークショップが開かれました。参加者は小学生9人と中学生1人、高校生1人の計11人です。

最初にお祈りをして聖歌を歌ったあと、パイプオルガンの簡単な仕組みを学びました。高さ1メートル弱の小さな本物のパイプオルガン(ポルタティブ)

で風を送る「ふいご」も見ることが出来、フルートやリコーダーを前にパイプオルガンが管楽器の集合体であることが確認。

次は実際に聖堂のオルガンで有名な曲の冒頭の部分を聴いて、いろいろな音栓の組み合わせで多彩な音色が出ることも体感しました。続いていよいよ一人ずつ用意してきた曲を弾いてみます。メロディだけの場合は横からスタッフの辻彩乃さんが伴奏をつけてくれます。思ったより皆堂々とチャレンジしていました。一通り弾き終わったらおやつ(の時間ですが、最後の礼拝で捧げる曲の割り振りをし、その準備、練習を3カ所で行われていました。

皆飲み込みが早くリタニの時の曲頭の音出しのタイミングもすぐ覚えてくれたし、急に決定した連弾も数回で息が合うように。

そして最後の30分、締めくくりに礼拝では齋藤みちさんのリードで全員による「音楽の捧げもの」をしました。川口基督教会の「子供の集い」(次ページ4段目につづく)

子どもと家族に寄り添うために 地域の子育て支援の場として生かされるために

社会福祉法人三光事業団 総合施設長 側垣 一也

主の御名を賛美し、皆様のお祈りの内に覚えていただき
ますこと感謝いたします。

一昨年春より準備を進め、

今年1月工事に着工いたしました
した児童養護施設三光塾の建
物の老朽化による、改築移転
工事がこのほど無事終了し、

去る9月20日(月)敬老の日に、
大阪教区サムエル大西修主教
様、川口基督教教会牧師テモテ
内田望司祭をお迎えして竣工
感謝式・祝別式を行いました。
当日は多数の行政関係者や学



校関係者、地域の方々、ボラ
ンティアの方々にお越しいた
だき、祝福をしていただきま
した。法人・施設職員一同深
い感謝をもって式典・交流会
を終えることができました。

1946年4月、故ヨセフ
側垣基雄司祭の祈りと感謝に
よって歩みを始めた三光塾は
今年で64年を迎えました。開
設当時は旧川西航空機の建物
を借用し生活を始めました。

昭和43年には新しい鉄筋の建
物を与えられましたがその建
物も老朽化したため、国と県
の補助金を得て改築すること
ができました。64年間過ごし
た鳴尾地区から約200m程
東側の小松地区に移りました。

移転場所は、学校法人武庫
川学院との土地交換で提供さ
れたところで、細い道路を挟
んだ2つの敷地に、小学生以
上の子どもの生活棟「三
光塾」(定員30人)と就学前
の幼児のホーム「小松のぞみ

の家」(定員10
人)の2つの建
物で構成されて
います。3階建
ての「三光塾」
には6人と9人

の子どもたちで構成される4
つのホームがあり、それぞれ
のホーム内にはリビングダイ
ニング・キッチン・バス・ト
イレがあります。

2階建ての「小松子どもの
家」は定員10人の幼児グルー
プホームで6人の職員と一緒
に生活します。乳児保育が行
えるスペースも作りまし
た。2階には、地域の方々にも利
用していただける地域交流ス
ペース「ひかりホール」を作
りました。また、子どもたち
が利用する心理療教室「すて
つぶルーム」や、ファミリー
ソーシャルワーカーが面接や
電話相談を行う「ほっとルー
ム」などもあります。短期に
お子さまを預かるショートス
テイや24時間子育て電話相談
も行っています。

故側垣基雄司祭の創設の思
いは、「大人の引き起こした
戦争で子どもたちが犠牲にな
っている。その子どもたちと

(前ページから続く)

の有志の子供達がかわいい祭
壇にローソクを点します。前
奏から始まり聖歌の伴奏も子
供達で、最後の後奏にいたる
まで一人一人の心を込めた奏
楽を感謝と共に神さまにお捧
げすることが出来ました。流
れもよく、皆とても上手なの
に感動しました。

感想として「皆上手に弾い
ていて、自分も頑張ろうと思
った」「緊張したけど楽しか

った。またやりたい」とい
う子供達の声と共に、参加して
いたご両親の一人からは「将
来教会の奉仕者として繋がっ
てくれるよう願っている」と
いう希望のメッセージもいた
りました。

これからも子供達がそれぞ
れの教会で導かれ、神さまの
もとで成長して用いられて欲
しいと思います。

(たかはし あきこ 礼拝・
音楽委員長)

生活を共にしなければ」でし
た。そして、親を失った子ど
もたちの親代わりとして生活
を始めました。それから60余
年、社会の様相は変わり、三
光塾で生活する子どもたちの
ほとんどが保護者から虐待な
どを受けた子どもたちです。

少子化・核家族化の進行の中
で「孤立した子育て」が行われ
そのしんどさが弱い立場の子
どもたちに向かうのが「虐待」
です。わたくしたちが児童養護
施設の役割は、子どもにとっ
て「安全で安心して生活でき
る場」「守られている感覚を
持てる場」の提供です。また
同時に、しんどい思いをして

いる孤立した子育て家族のサ
ポートも必要です。
この建物の完成によって、
私どもの法人には「三光塾」
「小松のぞみの家」「御殿山ひ
かりの家」「ひかり保育園」
の4つの器が与えられました。
これらの器の機能を連携させ
ながら、地域の中で「全ての
子育て家庭にとって必要と
される施設」「子どもと家族
に寄り添う施設」として運営
していきたいと願っています。
お近くにお越しの際は是非お
立ち寄り下さい。お待ちしております。
おります。

(そばがき かずや 川口基
督教会)

教 区 の 動 き

常置委員会報告

7月26日(第9回定例)

6月11日開催の第8回議事録を承認した。

I. 主教報告

- ① 7月、8月の教区の行事、主教の予定が報告された。
- ② 7月8日(木)に開廷させる予定であった審判廷は申立人が申し立てを取り下げたことにより開廷されなかった。

II. その他の報告

- ① 教務局長より、2010年11月23日に開催される第104(定期)教区会をもって、現在の教務局関係の諸委員の任期が終了する。また、教区会に提出されるであろう議案、それまでに処理すべき課題が提起された。
- ・ 6月一般会計報告がなされ、

承認した。

② 財務委員会から

- ・ 教役者給与基準表改定案が7月23日(金)開催の会計委員懇談会に提出され、基本的合意を得た、教役者会にも既に説明しており、11月23日開催の第104(定期)教区会に議案として提出される予定。
- ・ 教役者の処遇に関する実態調査集計結果の報告がなされた。
- ・ 昨年改定した「兼牧・管理牧師・協力聖職等の手当支給ガイドライン」ではあるが、「チーム・ミニストリー」を推進するために教役者は、複数の教会と関わりを持つことが教区主教方針として打ち出されており、現職教役者には手当を支給しない。無給の教役者は協力聖職Cと同様の扱いとする。」との財務委員会提案を了承した。
- ③ 神学生後援会常任理事会・聖職養成委員会・財務委員

会で共同して検討してきた

「神学生後援会規則」および「神学生後援会手とおよび奨学金規定」の改定案が説明された。

「教区会計規則」の変更を教区会に提出願ひ、それが承認されたならば、2011年度教区費予算に「神学生育成費」(仮称)を支出願ひことになる。

III. その他

- 1. 第104(定期)教区会に關して
磯 晴久司祭、林 正樹聖職候補生を書記に指名することとした。

9月2日(第10回定期)

7月26日開催の第9回議事録を承認した。

I. 主教報告

- ① 教区の行事、主教の予定が報告された。
- ② 8月1日村岡利幸氏が大阪聖ヨハネ教会の礼拝に出席し、礼拝後「深夜を含む非常識な時間帯に大量のFAXを教区内の人々に送りつ

け、大阪聖ヨハネ教会のみ

なさんをはじめ多くの方々に嫌な思いをさせたこと」を謝った。今後、なお時間はかかるが徐々に解決されることを願っている。また努力する旨の報告があった。

審判廷申し立てが取り下げられたことに伴ひ、「主にある兄弟姉妹へ」と言う主教メッセージを大阪聖ヨハネ教会へ公文書として、写しを教役者に送付した。

II. その他の報告

- ① 教務局長より次の報告がなされた
・ 京都教区報「つ乃ぶえ」に大阪教区教会の紹介が連載されたが、一通り終了した。次は教区内諸施設の紹介をしたいとの申し入れがあり、了解した。
- ・ 大阪教区報に京都教区の教役者を紹介する記事を連載することになった。
- ・ 10月に海外からの来訪者がある旨紹介された。
- ・ 7、8月一般会計報告がなされ、承認した。
- ② 石橋聖トマス教会隣地購入に關する募金状況報告がな

された。

③ 京都教区・大阪教区合同教役者会で討議された内容が報告された
― 京都教区と大阪教区の教区間協働および将来的方向に向けた報告―

京都・大阪教区の教役者幹事で内容・文言について詰め、合意できるものを、両教区の常置委員会書記ですり合わせをして、同じ文書を両教区の教区会に報告することを10月17日開催の合同常置委員会にて検討することとした。

④ プレ宣教協議会報告がなされた。
本件を、教区礼拝終了後に報告する。「分科会のまとめ」は印刷して教区内信徒全員に配布する。

III. 協議事項

- ① 第104(定期)教区会に關して
当日大阪に滞在中のエルサレム教区主教に開会礼拝の説教をお願いすることとした。
- ② 会計検査委員の交代について主教の提案に同意した。

③人事に関する主教からの諮問
2011年4月以降の教役者人事について現時点で決定している主教の人事案に同意した。

訂正とお詫び

教区報第414号の常置委員報告「大阪教区・京都教区合同常置委員会記録」の中に「京都教区の審判廷の申立人が大阪教区で被申立人になって、大阪教区で7月8日に開廷される。」との記事がありました。二つの審判廷は独立したものであり、関係があるかの表現は不適切でありましたので、「大阪教区審判廷が7月8日に開廷される。」に訂正してお詫びいたします。



祝受洗

守口復活教会

ヤコブ 向井 貞夫 (7月26日)

西宮聖ペテロ教会

アンナ 谷本 七海 (9月19日)



聖贖主教会

サラ 宇都宮コト (6月20日)

マルタ 宇都宮洋子 (6月20日)

ベタニヤのマリア 宇都宮由美 (6月20日)

マーガレット 宇都宮 憂 (6月20日)

セシリア 増森 禮子 (6月20日)

西宮聖ペテロ教会

ドルカス 梶山 美祈 (9月19日)

ヨハネ 青柳 拓馬 (9月19日)

サラ 青柳美乃里 (9月19日)

クララ 貝 実紀 (9月19日)

アンナ 谷本 七海 (9月19日)

魂の平安を

祈ります

石橋聖トマス教会

原田 修 (6月14日・79歳)

エリザベツ 黒崎 秀代 (8月5日・87歳)

川口基督教教会

ハンナ 山下恵美子 (6月30日・80歳)

守口復活教会

ヤコブ 向井 貞夫 (7月29日・74歳)

大阪聖パウロ教会

パウロ 岡本 俊輔 (8月11日・92歳)

恵我之荘聖マタイ教会

パウロ 黒田 昇 (9月6日・75歳)

大阪聖三一教会

エリザベツ 中野ノブエ (7月13日・96歳)

藤原 正誠 (8月16日・90歳)

西宮聖ペテロ教会

ペテロ 奥田 壯一郎 (8月30日・87歳)

訂正とお詫び

414号 12頁「魂の平安を祈ります」
庄内キリスト教会 達間キヨ子↓達間スミ子さんの間違いでした。

謹んでお詫び申し上げます。

教会・施設の動き

川口基督教教会

○聖堂2階の窓に、創立140周年記念のステンドグラスが入りました。テーマは「ゲッセマネ〜み手の中で〜」

西宮聖ペテロ教会

○「夏の行事1」恒例となっている男子会主催の「納涼懇親会」は、8月7日(土)午後6時から、「そうめんパーティー」の名で開催されました。色とりどりの提灯の下、元牧師である松岡慶一司祭ご夫妻、井上進次執事、林正樹聖職候補生をはじめ、

近隣教会や教区の親しい教友などゲスト9人を含む30人が、夜の更けるのも忘れて語り合いの時を楽しみました。

○「夏の行事2」8月29日(日)

午後、日曜学校は夏休みで日焼けした8人の子どもたちが聖堂で、長かった夏休みのお守りを感じて礼拝を献げ、その後会場を会館に移して、午後3時から恒例のバーベキュー大会。教師5人、保護者7人、婦人会・男子会7人(大人計19人)が協力し、子どもたちはおなかいっぱい頂き、夕闇の庭で元気に花火を楽しんで、行く夏を送りました。

桃山学院大学

○パイプオルガン奉獻20周年記念Vol.4として、土橋薫さん(オルガニスト協会関西支部長・大阪音楽大学、甲南女子大学講師)による、第99回オルガンコンサートを10月23日(土)午後2時(1時30分開場)に開催されます。入場無料。どうぞ、お誘い合わせの上ご参集ください。

教区関係教役者
逝去者記念聖餐式

◇ 11月10日 (水) 11:00 ~
於: 主教座聖堂 (川口基督教会)

説教者 成田邦雄司祭

- 1日 司 祭 ジェームズ・ウイリアムス (1920 英)
- 3日 司 祭 パウロ 山本 早太 (1988)
- 4日 司 祭 ヨハネ 張本 栄 (チャン・ボンヨン 1966)
- 宣教師 コンスタンス・メアリー・リチャードソン (1968 英)
- 5日 司 祭 パウロ 後藤 光敏 (1971)
- 9日 司 祭 ヨハネ 有近 康男 (1991)
- 11日 司 祭 ヨハネ 伴 君保 (1956)
- 12日 宣教師 ドーラ・レイチェル・ハワード (1947 英)
- 17日 宣教師 ガートルード・E・コックス (1906 英)
- 19日 司 祭 ヨハネ 側垣 正巳 (1997)
- 20日 司 祭 ホレイス・ジョージ・ワレン (1950 英)
- 21日 主 教 ホレイス・H・プライス (1941 英)
- 22日 司 祭 ベルナルド 小穴 藤雄 (1971)
- 23日 司 祭 北川 千代吉 (1939)
- 30日 宣教師 アミー・キャロライン・ボサンケット (1950 英)
- ?日 宣教師 アンナ・マリア・タプソン (1940 英)

◇ 12月8日 (水) 11:00 ~
於: 主教座聖堂 (川口基督教会)

説教者 田宮 紘司祭

- 1日 宣教師 エデイス・イライザ・ソープ (1930 英)
- 2日 主 教 チャイニング・モア・ウイリアムス (1910 米)
- 13日 司 祭 ジョン・キャリー・アンブラー (1946 米)
- 16日 司 祭 尾形 虎三 (1945)
- 17日 司 祭 アーサー・ラザフォード・モリス (1912 米)
- 宣教師 エミリー・ピショップ・ポウルトン (1926 英)
- 18日 宣教師 ジェーン・キャスパリ (1888 英)
- 22日 伝道師 清田 海一郎 (1904)
- 司 祭 近重 利澄 (1934)
- 27日 司 祭 ヘンリー・レナード・ブレビー (1942 英)
- 28日 伝道師 大塚 惟明 (1928)
- 29日 司 祭 マルコ 伊墻 八東 (1978)
- 30日 宣教師 オードリー・M・ヘンティー (1970 英)

*教役者逝去記念聖餐式は、毎月第2水曜日午前 11 時から、川口基督教会で行われます。ご関係の有無にかかわらず、どうぞ自由にご参加ください。

石橋聖トマス教会

○男子会は、恒例の川口基督教会男子会との1泊修養会を8月29日(日)午後から30日(月)午前にかけて開催しました。今回は、聖トマス教会が当番ということ

婦人会からも参加下さり、

出席者31人、川口15人(内女性5人)トマス16人(内女性2人)でした。

高槻聖マリア教会

○ヨシユア本間宗則さんと川合さとみさんは、10月2日に聖婚式を挙げられました。

ハラスメント防止・対応のための研修開催

8月22日(日)午後2時~24日(火)午前11時30分の日程で、城南キリスト教会において研修会を行った。教役者の勧めにより参加した人が6人(部分参加を含む)、スタッフ5人で有意義な時をもった。今後も継続的に開催して

また、教区内諸教会へ委員による出前説明会が持たれ、理解を深めていただいている。
(ハラスメント防止・対応委員会(仮称))

編集後記

このように大阪教区報415号を発行できますことを、主とご協力くださった皆様へ感謝申し上げます。今回は教区内外で、教区礼拝、川口基督教会創立140周年、プレ宣教協議会など様々な行事や取り組みがなされたことが一望できる教区報となりました。主催者・参加者の皆様から、誠に報告や感想が寄せられ、

重ねて感謝でございます。お詫びしなければなりませんのは、広報委員会の思いを越えて原稿が集まり、大変申し訳ありませんが、いくつかの原稿は、次号に掲載させて頂くこととなりました。どうぞご容赦ください。さらにより良き紙面作りのため、ご意見・アイデア等遠慮なくお寄せください。(司祭アンデレ)